

「ウイグル語とトルコ語」

1. はじめに

日本人にとり、シルクロードは自分達のルーツに繋がる懐かしい路という意識があります。NHK番組「シルクロード」のテーマ曲は、昔の記憶を呼び覚ましますが、現実の世界は、様相が異なります。

2013年に中国の習近平主席が「シルクロード経済ベルト」を提唱し、中国から中央アジア更に、西アジアに繋がる地域「一帯」の経済的連携を強調しました。更に、南シナ海、インド洋、アラビア海を経て地中海に至る海上交通路の「一路」（真珠の首飾り）を確保することで、中国から欧州に至る古代シルクロードと並ぶルートを構築しよう、としています。そのような時勢の中で、新疆ウイグル自治区は、中国にとり重要な位置を占めています。

都市戸籍を取得出来ることから、農民戸籍の漢民族が続々と流入し、現地のウイグル族との間での摩擦も問題となっています。そんな中、同じトルコ系イスラム教徒であるトルコ人から、ウイグル族を支援する声が上がっています。

新疆ウイグル自治区が注目される中で、ウイグル族はどこから来たのか、中国とどう関わって来たか、トルコ人と、どんな接点があったかを、彼らの居住地域である中央アジアの歴史的推移、言語や文字の面から検討したいと思います。

古代の歴史について、諸説がありますが、ネットのビッグデータにより、一つの説を辿って見ました。

シリア難民の欧州拡散など、四方を海で囲まれた島国日本では実感しにくいことですが、日本が特殊な環境にあることを痛感します。

2. 地球上での人類の拡散

気の長い話ですが、現代人類はすべて同一種＝ホモ・サピエンスで、その起源は、約20万年前にアフリカにあり、そこで種分化し、約10万年前頃から、その一部がアフリカを脱出し西アジアに入り、六万年前頃までに、一気に世界に拡がっていった、とされています。

出アフリカの原因は、アフリカ熱帯地域で大旱魃が起きたため、乾燥化、砂漠化を逃れての決死行だったのです。最近も異常気象と言われていますが、過去においても、異常気象が人類の移動の契機となる場合が多くあります。

今から7万年前～1万年前には氷河期があり、海面から蒸発した水分が、陸上で氷となって固まり、海に戻らないことから、海面水位が大幅に下がり、東南アジアでは、スンダランドという陸地が出現し、ユーラシアと北米が、ベーリング陸橋で繋がる事態が生じました。

人類は西アジアからユーラシア全土、オセアニア、スンダランド、北米、南米へ拡散して行きました。

ただ、5万年前～2万1千年前には極寒化が進行し、人口は極度に減少、人類は「島」状の小集団に分割されることになり、異なる肉体的特徴が定着し、「人種」が形成されることになります。

2万1千年前～一万4千年前に寒気がゆるむと、人類は再膨張を始め、1万3千年前の高温期には、人口爆発がおきます。ベーリング陸橋は水没し、スンダランドも島が残るのみで現代に至ります。

高温期突入直後の「冷え戻り」で人類は危機に直面します。こんな中、危機を乗り越えるため、より住みよい土地を求めての大規模な「民族移動」が行われました。

3. アルタイ語族

次のような話があります。

南シベリア～モンゴル高原地帯が「原郷」の原アルタイ族、現在「アルタイ語族」と呼ばれている三集団があります。アルタイとは、モンゴル語で「金の山」です。

- ①東進したツングース祖族
- ②中央～南方確保のモンゴル祖族
- ③西進したテュルク祖族

彼らの肉体的特徴は、極寒適応のためのずんぐりむっくり体型とノッペリ顔で、文化的特徴として、上天信仰、シャーマニズム、熊神崇拝、冬祀り、父系氏族社会などがあります。

①東進したツングース祖族

狩猟文化：トナカイ飼育が特徴的で、モンゴル系とも混じり合い、主にシベリア～旧満州～朝鮮半島に居住していました。

②中央～南方確保のモンゴル祖族

北方では騎馬放牧、中国に南下した集団は農耕民となって、東～中央アジアの広域に拡散し、中国の歴史の主役となりました。

③西進したテュルク祖族

早くから異なる系統の印欧祖族（アーリア族）とも混融しました。西ユーラシア発祥の騎乗、イラン系遊牧国家のスキタイ人の製鉄の技術など、優れた技術を引き継ぎ、歴史を席卷した「馬と鉄」の文明の担い手で、その直系の子孫には、アジア～地中海に広がるテュルク系諸族や、東欧・ロシア・華北の中国人も含まれます。

「馬の文明」は、テュルクからモンゴル、ツングースに伝播してテュルク祖族は中央～西アジアに、モンゴル祖族は中央アジア～華北、ツングース祖族は「馬とトナカイ」を飼い慣らし、シベリア～旧満州で、勢力を誇ることになります。

酒の原料は、各々で異なります。

ツングース祖族：口嚙み酒：穀物

モンゴル祖族：馬乳酒：馬の乳

テュルク祖族：葡萄酒：葡萄汁

これら三つの集団内の言語には系統関係が認められますが、集団相互の系統関係は解明途上です。

ツングース語族：

エヴェンキ語、満州語など

モンゴル語族：

モンゴル語、オイラート語、

ブリヤート語など

テュルク語族：

アルタイ語、トルコ語、
ウイグル語、ウズベク語、
カザフ語など

但し、三集団共通の特徴として、①母音調和があり②膠着語であり③語順がSOV型などがあります。

また血統の面で、アルタイ語族であることを特徴づける遺伝子は、Y染色体の「ハプログループC2」(CM217)で、彼らの多くに高頻度に観察されるとされます。

ウラル・アルタイ語族と、言語の系統を拡大する学説は現在、否定されています。

因みに、ブリヤート語を話しているブリヤート族は、郷里の親戚かと思うほど日本人に似ています。

4. テュルク (トルコ) 語族

中国歴史では、ツングース語族、モンゴル語族、テュルク語族の三集団が、中国の北部を脅かす存在として登場してきます。

東夷・西戎・南蛮・北狄の北狄、秦、漢代の匈奴、更に鮮卑、柔然、突厥・・・と続きます。

中国で、征服王朝と呼ばれている遼・金・元・清のうちで、金・清両国はツングース語族で、遼・元両国はモンゴル語族です。これらの国の活動は、欧州にも及びます。

ゲルマン民族大移動を誘発した4世紀のフン族はテュルク系です。

フン族の後を継いだアヴァール人はモンゴル系、時代下って、欧州で恐れられた元も、モンゴル系と続きます。モンゴル系の国名には、中国の「皇帝」を相当する称号の「可汗」が付くことがあります。

そんな中で、テュルク語族とは、トルコ系言語を話す民族であって、現在の居住範囲は、中央アジアを中心にシベリア～アナトリア半島までの広大な地域です。

テュルク語族は、分布状況から五つのグループに分けられます。

- ①北東語群（古ウイグル語）
- ②南東語群（現代ウイグル語）
- ③北西語群（カザフ語）
- ④ブルガール語群（フン語）
- ⑤南西語群（トルコ語）

言葉の面では、北東語群を発して、一部は南東に、その多くは西部へと広がったことが分かります。

5. ウイグル族の祖先

ウイグル族の祖先は、中国北部一帯に住んでいた遊牧民族だった、と言われています。遊牧の性質上、通常なら、家族単位の平穏な生活が出来、他の民族との共存も可能だったはずですが。しかし異常気象の場合には、そうは行きません。

氏族、部族、部落、部族連合の大集団を作って、他の集団と争う必要が起きます。ウイグル、とは「団結」「連合」を意味しますが、現代ウイグル族の祖先の国は丁零（古アルタイ語での「車」の意）、後に高車（移動車が大車輪の意）、更に鉄勒と呼ばれました。

因みに、鉄勒、とは、テュルクの当て字ですが、馬の頭にかけて、馬を御する革紐のことです。まさに「馬と鉄」の文明です。

丁零成立は中国では漢の時代です。

モンゴル系とされる鮮卑、柔然の後、モンゴル高原を治めたのがテュルク系である突厥です。突厥は、柔然の隷属の下、鍛鉄奴隷として鉄工に従事し、車輪の修理や武器、矢の製造を担っていましたが、柔然から独立し、部族連合の突厥可汗国を建てました。

鉄勒は、国の重要な構成民族で、突厥の衰退、隆盛によって、独立、服属を繰り返す内に、九つの有力部族が台頭して行き、その中から回紇（ウイグル）が突出しました。

回紇は、他のテュルク系と協力し、東西分裂した突厥の東突厥を滅亡させ、回鶻（ウイグル）可汗国を作りました。中国は唐の時代です。

唐末に至り、回鶻可汗国のあるモンゴル高原で異常気象が相次ぎ、多くの家畜が死に絶え、そんな中、内紛により、回鶻可汗国は崩壊し、テュルク系の堅昆（キルギス）が支配しますが、すぐにタタール族に追い出され、各部族が割拠する時代が、モンゴル帝国の成立まで続きます。

6. 天山ウイグル王国

回鶻可汗国崩壊後、西に逃れた一部が新疆ウイグル自治区の地に作ったのが天山ウイグル王国です。人々は、太古の湖の干上がり跡のタリム盆地にあるタクラマカン砂漠周縁部、天山山脈、アルタイ山脈の間のジュンガル盆地に点在するオアシス地域に定住するようになり、これがウイグル族の祖先ではないか、とされています。

タクラマカンとは、ウイグル語の「タッキリ・マカン＝無限の死」の合成語で、この周縁オアシスは、シルクロードの交通の要所として、主に東西の中継交易で栄えました。

タリム盆地の北に、ウルムチ市が、ウルムチの南東には、火炎山、交河故城、高昌故城などで有名な火州・トルファン市が、その東には楼蘭（クロライナ）があります。

今でも、オアシスで灌漑事業に携わり、主に農業に従事し、綿花、葡萄の栽培が得意な人々です。

他の一部は、更に西進し、後にテュルク初のイスラム国家であるカラ・ハン朝を建国します。

回鶻可汗国の崩壊後、モンゴル語族のモンゴル部は、バイカル湖湖畔を南下、モンゴル高原北東部に拡がりました。そこに生まれたチンギス・ハンは、諸部族を統一した後に、中国北部・中央アジアイラン・東ヨーロッパなどを次々に征服し、一代で、人類史上最大規模の世界帝国のモンゴル帝国の基盤を築き上げました。彼の死後には、次男チャガタイを祖にその子孫が君主のチャガタイ・ハン国が中央アジアに君臨して行きます。

13世紀初め天山ウイグル王国国王バルチュク・アルト・テギンは、モンゴルに帰順し、チンギス家の娘婿となり、モンゴル帝国でモンゴル王族に準ずる地位を得て、以後、重用されることとなります。天山ウイグル王国は小国なりとも、蓄えた知識・情報・経験・文化は素晴らしいものであり、モンゴル帝国の頭脳集団だ、とも言えます。

その理由は、天山ウイグル王国の立地にあります。ここはかつてオアシス通商文化国家の高昌国があった場所です。ジュンガル盆地にあった車師国が、後に、高昌に代わりました。高昌は、ウイグル祖族の国である高車、鉄勒、突厥、北魏、隋、唐とも国土を接しつつ、巧みに存続し続ける中、安史の乱後の唐の支配力低下により、天山ウイグル王国の支配下に入ります。

王国の首都は北のビシュバリク（トルコ語で「五つの城」の意）で、様々な人種と文化が混在する文化の坩堝でした。ウイグル人の他にも、漢人、イラン商人も居住し、仏教・道教・儒教・マニ教のいずれも信奉されていたそうです。

マニ教は、ソグド人により伝えられました。ソグド人はイラン系（ペルシア系）オアシス灌漑農耕民族で、商業を得意とし、長年に渡って、シルクロードを経済的に支配していたと言われていますが、同胞安祿山が安史の乱を起こしたため、各地で迫害を受け衰退することとなります。その後は、仏教が勢力を伸ばしますが、モンゴル帝国を経て、チャガタイ・ハン国時代になると、イスラム教が普及していくこととなります。

7. ウイグル語の表示文字

天山ウイグル王国で用いられたのは、ウイグル文字です。これはソグド文字に由来します。更に遡ると、神聖文字→原シナイ文字→原カナン文字→フェニキア文字→アラム文字→シリア文字→ソグド文字→ウイグル文字、となります。

兄弟文字に突厥文字があります。

更にウイグル文字→モンゴル文字→満州文字、と連なっています。

アラビア文字の由来は、シリア文字派生のナバテア文字です。

ウイグル文字は縦書です。他方、現在ウイグルで使われている文字は、右から左への横書のアラビア文字です。またトルコで使われている文字は、アルファベットです。

トルコで使われていたオスマン語は、アラビア文字表示でしたが、二十世紀に入り、アルファベット表示となりました。現代ウイグル語の表示は、アラビア文字表示の後では、中国のアルファベットでの表示を経て、改良アラビア文字表示となっています。また、この地を取り巻く近隣諸国では、言語をキリル文字で表示しています。

8. ウイグル語とトルコ語

最後にウイグル語とトルコ語の関係を検討してみたいと思います。

複数の言語の比較する比較言語学は、音韻（音声機能）、形態論（単語の構成の仕組み）、統語論（文構成の仕組み）、個々の語彙を比較して、同系性、親縁性などを研究します。文法上の共通点についても、先に述べた通りです。

①母音調和（発音の際の労力軽減のため、口や舌の形などを、前の母音と調和させる）を行うこと：

具体例では、口の形で平口、丸口、舌の場所で前舌、奥舌などです。

②膠着語（単語に接頭辞や接尾辞

を付けることで、文中の文法関係を示す語）であること：

具体例では「私」＋「てにをは」で文を作るなどで、日本語と共通点があります。

③語順が、主語→目的語→述語となるのが原則であること：

この点でも日本語とも共通です。

④語頭「R」の単語が稀なこと：

また、数を数える数詞を初めとし、共通の語彙が、多く認められます。

ウイグルを訪れた人、日本在住のウイグル人、トルコ人の話では、双方の言葉は、完全ではないものの身ぶり手ぶりを混じて、かなりの程度まで通じる、とのことでした。

また、テュルク系言語が、日本語の親戚であるかは別に、日本語に極めて近く、学び易い言語であるということが出来ます。ウイグル語を学ぶことで、日本語の仕組みを再確認することも可能でしょう。

歴史を遡ると、ウイグルの地には、テュルク系住民が多く、東西世界を結ぶ通商路の中央にあって国際都市として繁栄してきました。

古代中国の時代以来とかく蔑視されてきた国々での輝かしい歴史、文化に触れましたが、歴史的視野で見て、今後の発展が楽しみです。

終わり